

入学 おめでとう

入学を祝して

中央大学学長 河合 久 KAWAI Hisashi



今春、中央大学に学びの場を求める皆さんを、教職員一同、心から歓迎致します。皆さんは今日、中央大学の歴史を共に築く私たちの仲間に加わっていただきました。大学進学のために重ねられたこれまでの努力を讃えますとともに、本学への入学をお祝い申し上げます。

さて、学問や研究は、実社会とそこに生きる人々に無縁ではなく、現実事象から課題を発見し、理論を還元するといった形で、社会の営みとの相互作用により発展すべきです。常に時代とともにあり、社会の変化に適合するよう進化する。「實地應用ノ素ヲ養フ」に凝縮される中央大学の建学の精神は、このような学問研究の姿勢に根ざす教育観を表したものです。「素」とは社会に应用できる力の素地であり、「素ヲ養フ」とは知識はもとより、さまざまな体験や人との交流の中で培われるコミュニケーション力や議論する力、組織的な判断力、そして弛まず学び続ける力の涵養にほかなりません。

今日の社会基盤や産業構造の激しい変化は、物事を見るアングルを固定化できないほど加速しています。また、多様化の時代を迎え、私たちは自分の得意分野にこだわらず、異分野との融合、そして、まったく新しい人間関係や組織間の有機的相互

関係をもって、新たな世界を共創していく時代に直面しています。これから本学で学び、学生生活から得る成果を、新たな世界に価値あるものとして実装できるよう心掛けていただくことを、心から期待しています。そのことこそが本学のユニバーシティメッセージである「行動する知性。」を、ご自身によって体現することになるからです。

所属学部での学びから得た知識を社会の動きや日常の行動に当てはめて考える習慣を身につけるのもよいでしょう。そして、学生時代にしか得られない友人を多く作り、自分の考えを披歴したり共有したりして、語り合うことで知性は拡がりを見せるはずです。自分に殻を作らず、勇気をもって一歩進んでください。

私たち教職員一同は、希望と志をもって勉学に励む皆さんを、精一杯、応援しています。くれぐれも健康に留意され、将来に向けた歩みを着実に進められることを心から願っています。皆さんのご健康とご活躍を心から祈念して、お祝いのご挨拶と致します。

「冒険」ということ

法学部長 遠藤 研一郎 ENDO Kenichiro



中央大学に入学された皆さん、ご入学、おめでとうございます。さて、これから皆さんは、どのような目標を持ち、学生生活を過ごす予定でしょうか。目標は、それぞれが、その後の人生を考えて設計すればいいわけですから、何が正解ということはありません。大学の4年間をかけて、徐々にになりたい自分に近づけば、そして社会人としての下地を作れば、それでいいわけです。自分の人生ですから、進むべき道は自分で決める自由があるし、また、責任もあります。

ところで、皆さんの立てた目標は、どのくらい困難なものでしょうか。皆さんが、いくつかの道で迷っているのならば、どのように選択しますか。ちなみに私は、緩やかな道と険しい道があった場合、迷わず、険しい道を選びます。「冒険」は、「険しい道を冒す」わけですね。道は険しいほど、達成した時の喜びは、大きい可能性が高い。緩やかな道は、悪くはないけれど、「まあ、こんなもん」程度かもしれません。

確かに、険しい道には、達成できないという結末が待ち受けるリスクがあります。しかしそれは、失敗とは言いません。全て「経験」です。どのような結果であっても、目標に向かった時間は、自分のその後の人生にとって宝物です。是非、貴重な

経験ができる4年間にしてください。皆さんの人生の中で大学生活4年間だけは、等しく、その経験が積める時間と空間が保証されています。

もう1つ。近年、人工知能(AI)やロボットといった機械が、社会を大きく変えています。あらゆる物や情報が電子技術を媒介してつながり、それらが互いにリアルタイムで情報をやりとりし、人の指示を受けずに自律的に判断・機能し、最適な商品・サービスを提供できるようになっています。その進展は止まることを知りません。そのような中で皆さんがやるべきことは、何でしょうか。私は、「しっかりと学問に身を置くこと」だと思います。先人たちの歩んできた道に敬意を払い、自分の頭で創造し、自律的な意思(意志)のもとで行動し、仲間と思い(想い)を共有し、また、自分と異なる意見に耳を傾け、自分の成果を社会に発信する。そのようなことを通じて、自分に、機械では対応できない付加価値をつけるべきだと思います。伝統ある本学で、思う存分、学問と向き合っていただきたいと心から願っています。

皆さんの健闘を期待します。

不確実な社会を生き抜く真の実学

経済学部長 後藤 孝夫 GOTO Takao



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。中央大学経済学部教職員一同、皆さんを心から歓迎いたします。

中央大学経済学部はこれまで120年を超える歴史を刻んできました。この間、長きにわたり日本の経済学教育・研究の拠点として、数多くの有為な人材を社会へ送り出してきました。今日、その歴史と伝統のバトンを、皆さんが受け取ることになります。

これから皆さんが学ぶ「経済学」の語源は、「経世済民(けいせいさいみん)」という言葉にあります。これは「世を経め、民を済すくう」という意味であり、経済学とは単なる個々の利益追求の手段ではなく、社会をいかに豊かにするかを考える学問なのです。

現代社会は、AIをはじめとするテクノロジーの進化が生活を豊かにする一方で、環境問題や格差の拡大など、不確実性と激動の中にあり、私たちに新たな問いを突きつけています。

こうした問いに対峙するために必要なのが、本学の建学の精神である「實地應用ノ素(じっちおうようのそ)を養フ」という姿勢です。これは、社会の要請に応じ、確固たる理論と素養をもって行動することを意味します。

真の「実学」とは、すぐに役立つテクニックではなく、どのような変化にも適応できる普遍的な思考力です。経済理論で骨組みを理解し、経済史で過去の教訓を学び、そしてデータサイエンスや統計学を用いて実証的に分析する。この「理論」「歴史」「データ」という三位一体の経済学部での学びは、真の「実学」として現代の課題を解決する力となるでしょう。

そして、忘れてはならないのが経済学を学ぶ際の心構えです。経済学者アルフレッド・マーシャルは「冷静な頭脳と、温かい心(Cool Head, but Warm Heart)」の必要性を説きました。皆さんには、データを冷徹に分析する科学者の目と同時に、その背後にある人々の生活や感情に思いを馳せる温かい心を持ってほしいと願っています。多様な価値観を持つ学生が集まるこの多摩キャンパスで、互いに尊重し、刺激し合ってください。

大学生活の4年間は、人生で最も自由で可能性に満ちた時間ですが、驚くほど速く過ぎ去ります。だからこそ、失敗を恐れず、何事にも果敢に挑戦してください。

皆さんの充実した学生生活を、心から応援しています。

学びの扉を開く皆さんへ

商学部長 奥山 英司 OKUYAMA Eiji



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。中央大学へのご入学を、教職員一同、心から歓迎いたします。また、これまで皆さんを温かく見守り支えてこられたご家族をはじめ、関係するすべての皆様にも、心よりお祝いを申し上げます。

新しい環境に身を置くにあたり、期待と同時に不安を感じている方もいることでしょう。大学生活ではこれまでとは異なり、学び方や時間の使い方を自ら考え選んでいくことが求められます。その自由に戸惑うことがあっても、戸惑いながら考える時間こそが、皆さんが新しい段階へと歩み出している証でもあります。

いま社会は大きな転換期にあります。経済や企業を取り巻く環境は急速に変化し、これまで当たり前とされてきた考え方が通用しない場面も増えています。そうした時代だからこそ、社会は皆さんのような若い世代に大きな期待を寄せています。複雑な現実に向き合い、自分の頭で考え、周囲と力を合わせながら新しい価値を生み出していく力が、これからますます大切になるからです。中央大学商学部はそうした力を育てる場です。企業はどのように経営され、資金を調達し、価値を生み出し、それを社会に届け、成果をどのように伝えているのか。経営・会計・国際マーケティ

ング・金融といった多様な視点から、ビジネスの営みを総合的に学んでいきます。本学部が大切にしているのは、知識を個別に身につけることにとどまらず、現実の社会と結びつけて理解し使いこなしていく力、すなわち実学としての学びです。

中央大学商学部には、皆さんの学びと成長を支えるための環境と仕組みがあります。基礎から応用へと段階的に学べるカリキュラム、教員との距離が近いゼミナール、学修や進路について相談できる体制など、皆さんが安心して挑戦できるよう、さまざまな形で支えていきます。大学での学びは誰かから与えられるものではなく、皆さん自身が少しずつ築いていくものです。講義やゼミ、課外活動、人との出会いの一つひとつが、皆さんの視野を広げ、将来の選択肢を豊かにしてくれるでしょう。失敗や回り道も決して無駄ではありません。それらすべてが皆さんの力となります。

中央大学商学部は、皆さんの挑戦を全力で支えていきます。ここで過ごす日々が、皆さん自身の未来を切り開くとともに、社会の未来を形づくる礎となることを、心から期待しています。

実りある大学生活に向けて

理工学術院長 庄司 裕子 SHOJI Hiroko



ご入学おめでとうございます。基幹理工学部・社会理工学部・先進理工学部への入学は、皆さんがこれまで積み重ねてきた努力の成果であり、新しい学びへの第一歩です。4年間の大学生活をより有意義なものにするために、大切にしていきたいものが3つあります。

まず「目標」です。これまでは「大学に合格すること」が最大の目標だった方も多いでしょう。しかし、入学はゴールではなくスタートです。できるだけ早く、自分なりの目標を持ってください。最初は小さな目標でも構いません。目標を設定したら達成に向けて努力して下さい。達成できれば嬉しくなり、「次も頑張ろう」という前向きな気持ちが生まれます。その積み重ねが、やがて大きな成長につながります。AIの進展がめざましい昨今ですが、AIは与えられた目標を効率よく達成することはできても、自ら目標を持つことはありません。自分で目標を掲げて挑戦できることは、人間ならではの特権とも言えるものです。

次に「時間」です。時間は老若男女を問わず、誰にとっても平等に与えられた資源です。洋の東西を問わず、これまで数多くの偉人が時間の大切さについて名言を残してきました。しか

し、時間がそれほど重要であるにもかかわらず、私たちはつつい毎日無為に過ごしてしまいがちです。時間を大切に人が、最後には大きな成果を手に入れます。大学の4年間は長いようで、振り返ればあっという間です。日々の生活の中で時間の大切さを意識し、学びや挑戦に使ってください。

最後に「友人」です。インターネットやAIによって、知識や情報は簡単に手に入る時代になりました。しかし、人と人の関わりなくして社会は成り立ちません。他者との関わりの中で人間的な成長もあるでしょう。本学には多様な価値観や背景を持つ人が集まっています。ぜひ気の合う友人を見つけ、互いに刺激し合い、切磋琢磨してください。その経験は、将来必ず皆さんの力になります。

目標を持ち、時間を大切に、友人とともに歩む——この3つを心に留め、充実した大学生活を送られることを心より願っています。

大学はサンドボックスのようなもの

文学部長 緑川 晶 MIDORIKAWA Akira



入学、おめでとうございます。新入生の皆さんを文学部へお迎えすることをとても嬉しく思います。

いざ大学に入ってみると、サークルや部活動を通じて他の学部生と触れ合う機会がない限り、文学部ということ意識することは少ないかもしれません。それよりは自分が所属する専攻やプログラムを意識することの方が多く、それだけ、皆さんが所属する学問領域は広く、そして深いものです。

さらに、専攻の中でも複数の領域に分かれていますので、学年が進むにしたがって、より深い学びに誘われることでしょう。もしかしたら入学した時とは全く異なる領域かもしれませんし、初志貫徹でより深い学びに至っているかもしれません。

また「学び」は単に知識が増えることだけではありません。考え方そのものが変わり、より多くの見方や考え方ができるようになることも含んでいます。

そうした見方や考え方を広げるためには、もちろん学問としての学びも有効ですが、それ以上に、留学や旅行、サークルや部活動、あるいはアルバイトなどの課外活動を含めて、より多くの体験をすることです。そうした場で多くの人々と出会い、自分とは異なった考えや価値観を持つ人々と触れ合うことで、

自分自身の見方や考え方を広げてくれるものです。

そのような活動をするときに、どうしても障壁となるのが、失敗を恐れ踏み出すことを躊躇してしまうことです。失敗は体験しないと生じません。失敗は体験したことの証ですし、多くの気づきをもたらしてくれます。

ITの分野で用いられる用語の一つに、「サンドボックス」という表現があります。安全な実験場などと訳されることもあります。プログラミングを実世界で走らせる前に、失敗しても安全な空間を構築して、そこでまずは走らせることです。大学も実社会につながる「サンドボックス」のようなものです。是非とも様々な自分を試してみてください。

確かなものはいかに確かであるのか

総合政策学部長 堤 和通 TSUTSUMI Kazumichi



入学おめでとうございます。総合政策学部に皆さんをお迎えできたことは誠に嬉しく、皆さんを心より歓迎いたします。

不確実性の時代といわれて数十年が過ぎますが、昨今の国内外の情勢は、昨日までそうであったことが明日に続くという予断を許さないもので、予期しない変化に常に身構えることを余儀なくさせる状況にあるといえるでしょう。

政策と文化の融合を理念とする総合政策学部の学びは、政策と称される、社会が進むべき方向を探り、文化として継承されてきた価値を見極めることを基本に据えています。政策と文化は、政策が将来を志向し、人びとの行動を方向付けようとするのに対し、文化が過去からの連続性があり人びとの意識に根付いているという相違があると同時に、文化を無視した政策には実効性が期待できず、政策を無視していると文化が失われることにつながります。

学部には二つの学科があり、政策科学科では、政治・行政、経済・経営といった社会の諸制度がどのようにはたらくのか、国際政策文化学科では、地域・文化が多様であることと宗教や哲学が普遍的な価値を問うてきていることを学びます。

不確実な社会情勢で問われる重要な問いは社会のビジョンを

どのように描くのかということです。

ビジョンを描くという展望を可能にするには、社会の諸制度がどのようにはたらくのか、政策実現にどのように活用できるのかを知り、普遍的な価値として何が説かれてきたのか、地域や文化が多様であることを知る必要があります。このような学びなしにビジョンを描く展望を断念するのは「無知の知」の教えを弁えないものといえます。

社会のビジョンを描くことは、他者の生活を尊重し、人びとの諸活動を支える社会基盤を担う者として自身を認識するうえで欠かせないものと思います。皆さんには、ビジョンを展望するだけの確かなものが果たして手に入るのか、どのような意味で確かであるのか、確かなものがいかにして確かであるのかを政策と文化の融合を理念とする学びの中で考え抜いてもらいたいと思います。

豊かな学びのある4年間であるよう、教職員一同力を尽くします。

ゲージあげしよう!

国際経営学部長 **木村 有里** KIMURA Yuri



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。国際経営学部の教員・職員を代表して、皆さんを心から歓迎します。

私たち国際経営学部の合言葉は「世界を動かす人になろう!」です。世界という大きなフィールドを、自分の足で自由に駆けまわる主人公になるために、この4年間でどんな「力(ゲージ)」を身につければいいでしょうか。

まずは Language Gauge (言語のゲージ)。国際社会では、言語はゲームの基本操作、これが高くないと、そもそも戦闘に参加できません。次に Cultural Intelligence Gauge (異文化理解のゲージ)。文化を読み解き、違いを尊重する力です。これが低いと、味方も敵も間違えてしまいます。さらに Ethical Gauge (倫理のゲージ)。国際ビジネスにおいて、誠実さや透明性は最強の防具となります。そして Communication & Collaboration Gauge (対話と協働のゲージ)。世界は一人では動かせませんから、チーム戦で勝つための生命線です。最後に Resilience Gauge (折れない心のゲージ)。海外は予測不可能なイベントだらけ。ストレス耐性や、失敗しても立ち上がる力を身につけていすね。

ロールプレイングゲームでは、旅の途中で仲間を得たり、知

恵者の言葉を聞いたり、特別なアイテムを拾ったりしますね。大学生活も同じです。教室は知恵者の言葉を聞く場所であり、ときには新しい武器を手に入れる場所。ゼミやサークルは、長い旅を共にできる仲間と出会う場所。海外研修、留学、ボランティア、インターンシップ——そこには思いがけないアイテムが落ちています。

国際経営学部には、経営・経済・統計データサイエンス、そして世界の地域を横断的に学べるカリキュラムが用意されています。英語での講義、たくさんの課題、そしてあなたのゲージを上げてくれる「クエスト」が、キャンパスの至るところに散りばめられています。友人との議論や、挑戦の中で出会う成功と失敗——それらすべてが経験値となり、確実にあなたのゲージを押し上げてくれます。皆さんが、このキャンパスで大きく成長し、4年後に自信をもって世界へ踏み出す姿を心から楽しみにしています。

ようこそ、国際経営学部へ。あなたの物語は、ここから始まります。

視野を広げ、世界とつながる

国際情報学部長 **石井 夏生利** ISHII Kaori



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本日この日を迎えられましたこと、そして、皆さんを国際情報学部(iTL)にお迎えできることを、教職員一同心から歓迎いたします。

2019年4月に設立された国際情報学部は、「情報の仕組み(Information Technology)」と「情報の法学(Law)」を融合させた学びを特色としています。私たちは、スマートフォンやSNS、クラウドサービス、そして生成AIなど、常に進展する情報技術に囲まれて生活しています。これらを使いこなせると生活はととても豊かになりますが、インターネットには偽誤情報が蔓延し、人々が気づかないうちに誘導されるリスクも高まっています。こうした技術の進展は、未来予測を一層困難にしています。

そこで iTL は、第1の柱として、IT で何ができるのかを理解する力、第2の柱として、それが法的にどこまで許されるかを考える力を育むことを目指すカリキュラムを用意しています。また、第3の柱として、「グローバル教養」が重要な役割を果たします。英語力の修得や異文化理解を通じて多角的な視点を養うことの重要性は、いうまでもありません。iTTL では、この三つの柱を総合した学びを「iTTL」と呼んでいます。今年

の3月に iTL の4期生が卒業しました。皆さんにも、これからの学びの中で、iTTL という名前に親しんでいただければ嬉しく思います。

また、iTTL には、市ヶ谷田町キャンパスが人と社会をつなぐ「Ichigaya Tamachi Link」であるという、もう1つの意味もあります。皆さんには、3本柱の学びに加えて、iTTL での様々な活動を市ヶ谷から情報発信して頂きたいと思っています。特に、iTTL ではキャンパスの1階に広い談話スペースがあり、授業期間中は多くの学生が雑談をしたり勉強をしたりしています。授業でのグループ発表の準備を頑張っている学生もいます。とても過ごしやすい場所ですので、iTTL の輪を広げる機会に是非活用して下さい。

iTTL での学びと出会いが、皆さんの今後の可能性を広げる確かな礎となることを願っています。